

源平盛衰記の年代記的性格

——鹿谷事件発端部に至る叙述の検討を通して——

源 健 一 郎

はじめに

源平盛衰記の巻頭から目を通してゆくと、各年間の継ぎ目に改元記事の配されていることに気付く。仁安から文治に至る改元記事の存在は、盛衰記の年代記的叙述の上に、「年間」という大きな枠組みを示す楔的な役割を果たしている。盛衰記は、その年代記的叙述の上に、虚構性の甚しい鹿谷事件の発端部をどのように位置づけ、まわりの叙述との整合を図るのであろうか。本稿では、他の平家物語の諸本を視野に入れつつ、源平盛衰記の年代記的叙述の方法と、鹿谷事件に至る各記事の成り立ちについて検討を進めてゆきたい。

一 平家物語の年代記的形式

石母田正氏は平家物語の年代記的形式について、これが史書や公卿の日記とは異なる平家物語の文学的方法である

元号	盛衰記	延慶本	長門本	屋代本	覚一本
保元	×	×	×	×	×
平治	×	×	×	×	×
永曆	×	×	×	×	×
応保	×	×	×	×	×
長寛	×	×	×	×	×
永万	×	×	×	×	×
仁安	○	×	×	○	○
嘉応	○	×	×	×	×
承安	○	×	×	×	×
安元	×	×	×	×	×
治承	○	×	×	×	×
養和	○	×	×	○	○
寿永	○	○	×	○	○
元暦	○	×	×	○	×
文治	○	×	×	○	×

ことを明らかにされた⁽¹⁾。杉本圭三郎氏は石母田正氏の論考を承けて、平家物語が「年代記的形式によって史実と見せかけながら虚構を通して物語が強調する所を鮮明にする」ことを指摘されている⁽²⁾。これら先学の御論考は、主に語り本系の本文を対象としているが、「語り本の形成によって整えられてきた」⁽³⁾年代記的形式が盛衰記にいかに関り込まれるのか。それを示唆する指標のひとつとして、盛衰記、及び他の平家物語諸本に見られる改元記事を表示する。

仁安以降の改元記事を網羅的に増補し、年間という時間の単位を明らかにして、盛衰記は年代記的な構成を整えている。語り本系平家物語が、状況の切迫などを表す文学的方法として年代記的な形式を取り入れているのに対して、盛衰記はその叙述の全編に、年代記的な構成を性格として有するようである。

巻二から巻四の治承改元記事に至る叙述で盛衰記は永万以降五つの年間を表すが、治承年間には巻四から巻二十七までを叙述に提供している。年代記的叙述の起点である「永万元年春の頃」以降⁽⁴⁾、それまでの叙述に比べて流れる時間の速度は緩まるが、物語の主眼が置かれる治承年間などに比べれば、永万から安元までの各年間の叙述はテンポよく展開されている。また仁安から治承までの改元記事は、延慶本・長門本にも配されておらず、治承元年の鹿谷謀議の露見に至る叙述に、盛衰記独自の年代記的性格を窺うことができる。この表からもう一つ注意されることは、盛衰記に安元改元記事ばかりが欠落していることである。安元年間には鹿谷事件の発端が描かれるが、これと安元改元記事の欠落という異例との関連については後に言及したい。

二 永万・仁安・嘉応年間における年代記的叙述とその方法

永万年間是一年に過ぎぬが、ここには六条院即位・二条院崩御に続いて、額打論の記事が配されている。盛衰記の額打論の記事は語り本系の本文を前提としており、延慶本に見られる土佐房昌春は登場せず、延慶本にその関連説話として配される土佐房被斬記事もここでは採られていない。延慶本ではこれに治承四年という年次が示され、編年体の枠組みからはみ出す記事となっているが、延慶本の編年体の齟齬を解消するために、盛衰記は当記事を採用しないものと考えることができる。

次に仁安年間の高倉院即位記事について、盛衰記に従って叙述を検討してゆく⁽⁵⁾。

盛衰記

同二年八月ニ改元アリテ、仁安ト云、^a仁安元年十月七日、高倉院六歳、東三条ニテ春宮立ノ御事アリ、同二年二月十九日、御歳七ニテ御即位、

(略)

六条院二歳ニテ禪ヲ受サセ給タリシカ共、僅ニ三年ニテ同年二月十九日春宮踐祚有シカハ、御位ヲ退セ給テ、新院ト申ケル、御歳五歳ニ成セ給ヘハ、未御元服モ無童ナ帝ニテ太上天皇ノ尊号、漢家本朝コレソ始ナルラント珍キ事也、終ニ安元二年七月二十八日、御歳十三ニテ隠サセ給キ、哀ナル御事也、仁安三年三月廿日、大極殿ニシテ新帝有御即位、此君位ニツカセ御座ヌレハ、弥平家ノ栄トソ見エシ

(卷三「高倉院春宮立御即位」)

延慶本

仁安元年今年ハ大嘗会有ベキナレバ、天下其宮ミナリ、^a同年十月七日、去年親王ノ宣旨蒙ラセ給シ皇子、東三条殿ニテ東宮立ノ御事アリケリ。(第一本十三「建春門院ノ皇子春宮立事」)

六条院、御譲ヲ受サセ給タリシカドモ、僅ニ三年ニテ、同年二月十九日、春宮(高倉院)八歳ニテ大極殿ニテ踐祚アリシカハ、先帝ハ僅ニ五歳ニテ御位退セ給テ、新院ト申テ、(同六月十七日ニ上皇御出家アリ。後白河法皇トゾ申ケル、)未ダ御元服ナクテ、御童形ニテ、太上天皇ノ尊号アリキ。漢家、本朝、是ゾ始ナルラムト、メヅラシカリシ事也、此君ノ位ニ即セ御坐スハ、弥平家ノ栄花トゾミエシ。

(第一本十四「春宮踐祚之事」)

傍線a 仁安元年の高倉院春宮立については延慶本と同じ記述を採る。玉葉等は十月十日としており、日付けについては盛衰記・延慶本ともに三日間の史実誤認があるが、盛衰記のみに示される高倉院の年齢は正しい。次に盛衰記のみに示される傍線b 仁安二年の高倉院即位の記述については、史実としては仁安三年の受禪のことであり、高倉院の年齢も八歳が正しい。また、盛衰記には六条院側からの記述として傍線cに同年春宮踐祚とある。六条院受禪の年齢は史実に相応しているが、高倉院踐祚の日付けについては問題がある。前の叙述からそのまま読むと仁安二年のこととなるが、「僅ニ三年ニテ」という六条院の在位の期間から考えれば、六条院の即位が永万元年のことであるので史実通りに仁安三年のこととしても受け取ることができる。傍線dに記された六条院讓位の年齢から考えても同様である。一方延慶本の傍線eには、仁安三年のこととして表されており、高倉院の年齢も史実通りに八歳としている。盛衰記の傍線dに見られる六条院の年齢については、仁安二年次とすれば四歳とすべきであるが、史実としての六条院讓位の年齢は、延慶本の傍線dにもある通り五歳である⁹⁾。盛衰記の傍線e 仁安三年大極殿での即位については史実通りだが、高倉院即位の記述が重出することとなる。延慶本はこの記事を採用しない¹⁰⁾。このような記事内容の混乱・重出の露呈は、一連の高倉院即位記事の構成に無理のあった事を窺わせている。

以上の検討から問題となるのは、史実として、あるいは延慶本にも、仁安三年に五歳の六条院が八歳の高倉院に讓位したとされる記事が、盛衰記においては、仁安二年に五歳（あるいは四歳）の六条院が七歳の高倉院に讓位したという記事に改変されているということである。年次の改変に合わせて、高倉院の年齢も改変しているので、単なる誤写とは考えにくく、編著者の意図的な改変として受け取るべきであろう。この後、改元記事を紹介して嘉応年間記事へと叙述が進むために、盛衰記の仁安年間記事はここにしか存在しない。かかる叙述操作は、八仁安元年―高倉院春宮立／八仁安二年―高倉院踐祚／八仁安三年―高倉院即位／といった、仁安年間を均等に埋める年代記的体裁に整えるためであろう。

嘉応年間の叙述について検討する。嘉応年間の冒頭に配される後白河院の出家記事は、延慶本では、仁安年間の検討の際に示した本文中で括弧に括弧しておいたように、前後の脈絡を欠く不自然な挿入句として表される。盛衰記はこれに嘉応元年という年次を明示して、ひとつの記事としてまとめている（巻三「一院御出家」）。戒師を勤めた僧侶の名前や、逆修の日数等の記事内容は玉葉の六月十七日条に相応する史実に忠実な叙述である。嘉応二年に、殿下乗合の記事が用意されることは平家物語の諸本に共通するが、他の諸本が摂政基房と資盛の衝突の日時・状況を史実から改変して、より切迫した報復に演出するための虚構を施す⁽⁸⁾のに対して、盛衰記は玉葉に即した史実通りの日時・状況に改訂している⁽⁹⁾。その一方で、事件の黒幕を清盛とする、他の諸本に通ずる虚構の筋書きは守るのである。この後嘉応三年正月の朝餽行幸の記事をもって嘉応年間記事は閉じられる。

永万・仁安および嘉応年間の叙述の検討から、盛衰記の年代記的叙述の方法として、次の二点が明らかに成ろう。第一点は、編年体に対する緊密な構成意識である。盛衰記は各年次に記事を配し、編年体からはみ出す記事は排除して、盛衰記の叙述を緊密な編年体として仕上げようとする。第二点は一方ではより史実に忠実に、そうした一方で虚構の設定をもより史実らしく叙述を進める姿勢である。仁安年間の検討に見たように、盛衰記は緊密な編年体を構成するために、六条院讓位の年次を史実から改変しながらも、延慶本には記されない高倉院等の年齢や、即位の日付けを史実に忠実に増補する。このように、少なからぬ叙述を他の平家物語諸本に対して、より詳しく増補し、より史実に忠実に改訂することによって、享受者にその史実離れた部分をも史実であるかと思わせるような叙述姿勢を盛衰記は有する。より史実に忠実な叙述の増補・改訂によって、史実離れた叙述を史実に準え、その史実性を保証しようとするのであろう。より一層史実に忠実であろうとする叙述姿勢、これを「史実準拠の叙述姿勢」として把握し、その一方で年代記的な体裁を整えるために、あるいは物語の意図を達成するために、虚構を取り入れながらもより史実らしく叙述を整えようとする叙述姿勢、これを「史実準擬の叙述姿勢」として把握する。そして両者を一括して「史

実に準ずる叙述姿勢」として定義しておきたい⁽⁴⁰⁾。

三 承安・安元年間における年次の隳化

承安元年に盛衰記は、延慶本にも見られる徳子入内・相撲節の記事を有するが、続いて配される成親らの大将争い記事や、平家討滅の謀議のために鹿谷に寄り合う記事には日付けが記されていない。盛衰記の叙述で年次の明らかにするのは、盛衰記の独自増補である巻三「一院女院殿島御幸」や「澄憲祈雨」に示される承安四年という記述を待たねばならない。承安年間には承安二年・三年の年次が明示されないが、そこには大将争い記事と鹿谷寄合記事が該当するものと考えてよい。

このような承安年間の構成は安元年間にも同じくし、安元年間には安元元年・二年という年次を示す記事が配されない。そもそも改元記事が欠落しており、盛衰記の年代記的構成において異例を呈しているが、安元三年という年次が白山事件の記事に至って漸く明示される。日付けが記されずに配された平家討滅を画策する鹿谷酒宴の記事は、安元元年か二年のこととして設定されていることになる。

かかる年次の隳化を踏まえて、これまでの検討の結果を延慶本と比較しながら表示する⁽⁴¹⁾。(次頁参照)

延慶本には、嘉応三年から治承元年までの六年の空白、安元二年の記事へは一年の時間の遡上が存在する。盛衰記はそれらを解決して緊密な編年体を保とうとしており、盛衰記の編著者が永万元年以降、その叙述に年代記的な性格を与えていることが看取される。

なお、延慶本では一度の鹿谷謀議が、盛衰記では寄合と酒宴というかたちで、承安年間と安元年間に分置されている。各年間に記事を配するという点では、年代記的構成を支える一助となるが、両記事ともに年次が隳化されてお

盛 衰 記				延 慶 本			
永萬元	六条院即位・二条院崩御・額打論	永萬元	六条院即位・二条院崩御・額打論	なし	なし	なし	なし
永万二	仁安改元	永万二	仁安改元	なし	なし	なし	なし
仁安元	高倉院春宮立	仁安元	高倉院春宮立	なし	なし	なし	なし
仁安二	高倉院踐祚	仁安二	高倉院春宮立	なし	なし	なし	なし
仁安三	高倉院即位	仁安三	高倉院即位	なし	なし	なし	なし
仁安四	嘉応改元	仁安三	高倉院即位	なし	なし	なし	なし
嘉応元	一院出家	嘉応二	殿下乗合	なし	なし	なし	なし
嘉応二	殿下乗合	嘉応三	成親望大將	なし	なし	なし	なし
嘉応三	朝親行幸・承安改元	嘉応三	成親望大將	なし	なし	なし	なし
承安元	徳子入内・相撲節	嘉応三	朝親行幸・徳子入内・相撲節	なし	なし	なし	なし
今度	成親望大將	嘉応三	朝親行幸・徳子入内・相撲節	なし	なし	なし	なし
かかりし程	左右大將	嘉応三	朝親行幸・徳子入内・相撲節	なし	なし	なし	なし
承安四	一院殿島御幸・澄憲祈雨	嘉応三	朝親行幸・徳子入内・相撲節	なし	なし	なし	なし
鹿谷寄合	七月除目・相撲節	嘉応三	朝親行幸・徳子入内・相撲節	なし	なし	なし	なし
鹿谷酒宴	七月除目・相撲節	嘉応三	朝親行幸・徳子入内・相撲節	なし	なし	なし	なし
白山事件	七月除目・相撲節	嘉応三	朝親行幸・徳子入内・相撲節	なし	なし	なし	なし
安元三	白山事件	嘉応三	朝親行幸・徳子入内・相撲節	なし	なし	なし	なし

り、緊密な編年体の構築という点については年代記的構成に矛盾する。これが編著者の意図的な記事操作であるならば、その年代記的性格のなかでどう解されるものであろうか。承安・安元年間の各記事の成り立ちについて検討を加えて考えてゆきたい。

四 承安年間記事の成り立ち

徳子入内・相撲節・重盛除目の各記事の成り立ちについてみる。

盛衰記

今年四月廿一日改元アリテ、承安元年ト云、三月ニハ、大政入道ノ第二ノ御女コトシ十五歳ニ成セ給フ、法皇ノ御猶子ノ儀ニテ御入内アリ、中宮徳子トソ申、七月ニハ相撲ノ節ナント聞エキ、小松大将、折節花ヤカニ最目出ソ御座ケル、可然宿報ニテ官位コソ思サマ也トモ、ミメ白ハ心ニ叶ヘキニハアラネ共、何事モ關タル事ナシ、争角ハ御坐ヤラント、人々ホメ被申ケリ、

(卷三、朝覲行幸)

延慶本

A 三月ニハ入道相国ノ第二御娘、女御ニ參給テ、中宮ノ徳子トソ申ケル。法皇御猶子ノ儀也。七月ニハ相撲節アリ。重盛右ニ連ヲハシケレバ、「近衛大将ニ至ラムカラニ、容儀、身躰サヘ人ニ勝給ヘルハ」ト、申アヒケルトカヤ。「加様ニ讃奉テ、セメテノ事ニヤ、末代ニ相応セデ御命ヤ短ク御坐セムズラム」ト申アヒケルコソ、イマハシケレ。(第一本十九「主上御元服之事」)

B 大政入道第二ノ娘、后立ノ御定アリ。今年(嘉応二年)十五ニゾ成給ケル。建春門院ノ猶子也。

(第一本十七「藏人大夫高範出家之事」)

承安元年の徳子入内・相撲節の両記事について盛衰記・延慶本の本文を示した。延慶本は嘉応二年十二月の記事に徳子立后の記事を有しており、Bとして示しておいた。延慶本のAは徳子の女御参内を表し、Bは立后の定めを表すので重出ではない。しかし、Aに承安元年三月―法皇の猶子とあるのに対して、Bには嘉応二年十二月―建春門院の猶子とあり、時期ならびに猶子の先について両記事は矛盾する¹⁰⁾。玉葉には承安元年十二月二日条に徳子の立后の定め、同十四日条に法皇の猶子として徳子入内、同廿六日条に女御宣旨とあって、年次・猶子の先についてはA、十二月という時期についてのみBが正しいことになる。ただしBに示される徳子の年齢については史実通りである。盛衰記の

本文に立ち返ってその成り立ちを考えると、前半の傍線部にBのごとき延慶本の本文から清盛の呼称・徳子の年齢について取り込み、後半の波線部はAのごとき延慶本の本文をそのまま受け継いだ上で、より包括的な意味を有する「御入内」という用語によってひとつの叙述に統合したものであろう。つまり入内の年次・徳子の年齢・猶子の先について、盛衰記は史実に忠実に改訂するが、三月という時期については史実と違う叙述をそのまま受け継いでいる。

続く承安元年七月の相撲節は、史実として確認し難い。重盛の官職も、承安元年の時点ではまだ右衛門督である。ただし、延慶本が「七月ニハ相撲節アリ」と断定するのに対して、盛衰記は「七月ニハ相撲ノ節ナント聞エキ」と風聞の体裁を取り、重盛の官職の叙述についても、延慶本が「近衛大将ニ至ラム」と、官職名とそこへの到達を明らかにしているのに対して、盛衰記は「小松大将」とするばかりである。盛衰記は、承安元年における相撲節の存在とその時点での重盛の官職について、臆化した叙述に改変している。

承安元年の徳子入内・相撲節が時期的に史実に違うことは、盛衰記の編著者に認識されていたのであろう。しかし、盛衰記は承安元年に他の記事を有しておらず、年代記の体裁を整える上で、承安元年を三月・七月と均等に埋める両記事の設定は好都合であった。また両記事とも独立的な記事であるので、年代記的な構成の上に年次を特定する役割も大きい。盛衰記は叙述を臆化して、史実に対する配慮を施しながら、敢えてこのような虚構の設定を延慶本の本文から受け継いでいる。

当時の相撲節としては、承安四年七月のものがよく知られ、多くの史書にも記事が見える。盛衰記でも承安四年の記事である卷三「澄憲祈雨」に、重盛の右大将除目記事とともに配されている。重盛の官位到達から相撲節における重盛称讃へとつなぐ構成は、承安元年七月の相撲節記事に通ずるが、ここでは「右近大将」と官職名の明示される重盛の右大將着任も史実通りであり、詳細に語られる相撲節の様子も玉葉の記事内容によく相応している¹⁰⁾。盛衰記は重盛の官職・相撲節に対して、ここで改めて史実に忠実な叙述を為し、承安年間の一連の叙述の史実性を保証しよう

としている。また承安元年記事で徳子入内・相撲節の両記事の果たした役割と同様に、これらの除目や行事の記事も独立的なもので、承安四年という年次を特定する上でも有効である。

承安年間の最初の年である承安元年と、実質的に最後の年である承安四年の叙述におけるこのような記事操作は、兩年次の編年体の上での位置付けを明らかにし、一連の承安年間の叙述を史実に準ずるものに仕上げようとする盛衰記の編著者の叙述姿勢の現れとして理解することが出来る。こうしてみると、承安元年と四年の両記事の間に配される大将争い記事と鹿谷寄合記事の年次が隴化されることも、編著者の意図的な叙述の操作として把握されよう。

一方、延慶本は承安四年除目記事を採用せずに、その相当位置に安元三年三月除目による重盛の内大臣着任記事（第一本廿二「成親卿人々語テ鹿谷ニ寄合事」）を置く。これも史実として確認できるが、盛衰記には採られていない。先に見たように、延慶本は次の白山事件を語るのに一年の時間の遡上を必要としている。盛衰記が編年体に沿ってこの記事を組み込もうとすれば、白山事件から山門興振への叙述の間に割り込まねばならない。編著者がこれを嫌ったために、盛衰記における安元三年除目記事はその位置を失ったのであろう。承安四年除目記事の増補の果たした役割とは逆に、安元三年除目記事の省略は、安元年間の年次を隴化する方向に作用している。

五 安元年間記事の成り立ち

安元年間の年次の隴化を考えるために、建春門院の崩御記事の扱いについて見る。

盛衰記

同（永万年元）十二月廿五日、故建春門院ノ位未浅シテ、東ノ御方ト申ケル時ノ御腹ノ皇子、五歳ニ成セ給ヒケルニツ、親王ノ宣旨ヲ下サレケル、

（巻三「高倉院春宮御即位」）

この永万元年の記事で、建春門院に「故建春門院」という呼称を用いるのは、叙述が既に物語的現在の中にあることから考えると異例である。建春門院の崩御は安元二年のことで、「故建春門院」という呼称は後の崩御を先取りしている。延慶本の当該記事は「東ノ御方」(第一本十三「建春門院ノ皇子春宮立事」とするばかりであり、延慶本が安元年間に配する建春門院の崩御記事(第一本三十三「建春門院崩御之事」)は、盛衰記に採られていない。盛衰記がその崩御の日付けを明らかにするのは治承年間に叙述が進んでからである。

A 大納言ハ我身ノ上トハ露知給ハス(略) 急キ被出ケリ、安元二年七月ニ建春門女院隠サセ給テ、其御一周モ果サレハ、諒闇ノ直衣コトニ内淨タハヤカニシテ、(後略)

(巻五「成親以下被召捕」)

B 又殊ニ哀ナル御事アリキ、去シ安元二年ノ七月ニ、御母儀建春門院隠サセ給ケリ、主上今年ハ十五ニソナラセ給ケル、不斜御敷アリテ、御寢膳モ御倦キ程ナリケリ、

(巻二十五「時光茂光御方違盗人」)

延慶本の当該記事を参照すると、Aの成親の装束については「キヨゲナル布衣」(第一末十「新大納言召取事」として建春門院の崩御に触れず、Bにあたる叙述(第三本四「青井ト云女内へ被召事付新院民ヲアワレミ給事」)でも、建春門院崩御の述懐に日付けは示されない。建春門院に関連する記事が初出である永万元年の段階で、盛衰記が既に「故建春門院」という呼称を用いるのは、その先そう長くない時点での崩御を暗示するためであろう。一方で崩御の日付けを明らかにするために、治承年間の記事に日付けを付した建春門院の崩御に関する記述を増補し、後からこれを振り返る体裁に整える。盛衰記はこうした手順を踏んで、安元年間に配すべき建春門院の崩御記事を省略したようである。

こうした記事操作は、六条院の崩御記事についても同様である。

盛衰記

未御元服モ無童ナ帝ニテ太上天皇ノ尊号、漢家本朝コレソ始ナルラント珍キ事也、終ニ安元二年七月二十八日、御歳十三ニテ隠サセ給キ、哀ナル御事也、
(卷三「高倉院春宮立御即位」)

延慶本

A未ダ御元服ナクテ、御童形ニテ、太上天皇ノ尊号アリキ。漢家、本朝、是ゾ始ナルラムト、メヅラシカリシ事也。

(第一本十四「春宮踐祚之事」)

B同廿七日、六条院崩御ナル。御年十三。故二条院ノ御嫡子ゾカシ、御歳五歳ニテ太上天皇ノ尊号アリシカドモ、未ダ御元服モ無テ崩御ナリヌルコソ哀ナレ。
(第一本三十四「六条院崩御之事」)

永万年間の高倉院即位記事に、六条院の崩御記事が組み込まれている。盛衰記は編年体の崩れを厭わずに、安元二年の崩御を先取りして記しているが、延慶本の当該記事Aにこうした記述は見られない。また、延慶本が安元年間に配する六条院の崩御記事(引用本文B)を盛衰記は採っていない。新院の登場に対する「珍」、六条院の崩御に対する「哀」という盛衰記の批評句は、延慶本のA・Bにそれぞれ対応しており、盛衰記が延慶本の本文の六条院崩御記事を先取りして、永万年間の高倉院即位記事に割り込ませたことは明らかであろう。治承年間の高倉院崩御の関連記事(巻二十五「前後相違無常」)には、六条院崩御を振り返る叙述が、日付けを付して独自に増補されている。盛衰記は、かくのごとき記事操作を経て、安元年間に配されるべき六条院崩御記事を意図的に省略したのである。

延慶本における安元二年の建春門院・六条院崩御記事は、安元三年までの年次を明らかにする白山神輿の登山記事に続いて配され、編年体に齟齬をきたしている。編年体に沿ってこれらを組み込もうとすると、白山事件系統の記事に割り込まねばならず、往々にして同一の場面や事件をまとめて配する盛衰記がこれを嫌ったとも考えられよう。しかし改元記事や除目記事と同様に、崩御記事もそれ自体独立的なもので、年代記的構成において、安元二年という年次を明確にする役割は大きい。これを敢えて省略するには安元二年という年次、延ては安元年間を臙化しておこう

とする意図が働いている。盛衰記で、白山事件の他に安元年間の記事として配されるのは、鹿谷酒宴の記事ばかりである。先に検討した大將争い記事・鹿谷寄合記事の配される承安年間も合わせて、鹿谷事件の発端部の年次はすべて臚化されていることになる。

六 鹿谷事件発端部の設定

大將争い記事は成親と宗盛、徳大寺実定を中心に展開する。左大將は宗盛に定まり、徳大寺は清盛に取り入って地位を得、成親は平家討滅の謀議に走ったとされるが、これは史実離れた虚構の筋書きである。重盛・宗盛が左右大將に並んだ安元三年三月、徳大寺は官を辞して左大將を望む身になく、清盛に取り入るための敵島参詣も、左大將着任の後、治承三年三月に赴いたものである。このような虚構の筋書きは、平家物語が生成されて行く中で受け継がれてきた構想の継承にほかならぬが、延慶本等がこれに治承元年という年次を明示し、編年体に齟齬をきたすのに対して、盛衰記はその年次を臚化した上で諸本が記事を欠く承安年間に組み込み、編年体に沿って年代記の構成を整えている。

ただし承安年間に鹿谷謀議を設定するとすると、治承元年五月二十七日とされる謀議露見に至るまでの四年前後の期間が問題となろう。諸本にならって鹿谷謀議を一度設定するだけでは、間に山門騒動を挿むとはいえ、謀議の決定から露見までの四年間、成親はただ手を拱いていたことになる。ここに盛衰記に見られる鹿谷謀議の分割の必要があったのではなかろうか。謀議の端緒として鹿谷寄合を承安年間に設定し、その決定の場として鹿谷酒宴を安元年間に置く。もとよりこれも編著者による虚構であり、日付けも明示されずに、ただ安元年間の出来事として設定される。盛衰記は一貫して安元年間の年次を臚化しているが、神輿が白山を立つ安元三年に日付けを明らかにするので、

鹿谷酒宴の記事は山門騒動の直前である安元二年にまで下って読むことができる⁴⁰。これによって鹿谷の謀議は承安年間から安元年間にかけて二年から四年の間続けられていたということになる。

平家物語の諸本は鹿谷謀議に「常ニ寄合々々談議シケリ」⁴¹という説明を付すが、これを盛衰記はその年代記的構成の上に明らかにしたといえよう。安元年間における鹿谷酒宴の位置付けは、成親の決行をためらった理由として諸本が示す「成親卿ハ山門ノ騒動ニ依テ私ノ宿意ヲバ押ラレケリ」⁴²という説明にも沿ったものとなる。編年体に沿った安元改元記事の挿入可能な位置は、鹿谷酒宴記事の前後となろうが、その挿入は鹿谷酒宴を安元元年前後のものとして特定してしまう。然らば謀議の分割が意味を為さないために、安元改元記事はその位置を失ったのであろう。かかる鹿谷事件発端部の設定は、年代記的構成において楔的役割を果たす改元記事を欠くという異例を余儀なくするものでもあった。

鹿谷事件発端部の虚構性は、日付けの臆化並びに鹿谷謀議の分割のごとき自由な記事操作を可能にした。これによって盛衰記は諸本が記事を欠く承安年間に鹿谷寄合の記事を配し、その構成を一見年代記的な体裁に整えている。しかし先に史実準擬の叙述姿勢を認めたように、盛衰記は虚構と知りながらも、年代記的構成を守らんがために敢えて年次を明示していた。ならばなぜ承安・安元年間の鹿谷謀議に対しては、適当な日付けを示さぬのであろうか。

ここに盛衰記の史実性に対する平衡感覚といったものを見ることができよう。史実準擬の叙述は史実準拠の叙述によって史実性が保証され、史実に準ずるものに整えられる。ところが鹿谷事件発端部の筋書きはもとより虚構であり、その史実性を保証する材料などあるまい。そこでその年代記的な性格を一步後退させて、承安・安元年間をいわば「年間記」的な叙述として表したのであろう。謀議継続の期間、謀議露見までの期間については、二度の鹿谷謀議を、「年間」という枠組みの中で時間的に融通のきく不確定な存在としておいた方が、鹿谷事件発端部を史実らしく仕立てる上で都合がよい。むしろ日付けを明示せぬ方が鹿谷謀議を歴史の裏側の出来事として、より暴露記事めいたもの

に表すことにもなろう。

虚構の設定に対しても、史実に準ずるものとして表すことのできるものであるならば、年代記的構成を構築するために年次を明らかにして取り込み、その一方で虚構性の甚しい記事については年次を臚化し、「年間記」的な構成の中に取り込む。年代記的構成に一見矛盾する年次の臚化は、盛衰記の史実性に対する平衡感覚の爲す、年代記的性格の「年間記」的なものへの応用として見ることができる。

まとめと展望

本稿の要点をまとめておきたい。

第一点は、盛衰記がその叙述に年代記の形式を適宜に取り入れるのではなく、その叙述に年代記たる性格を有していることである。年代記とは編年体の枠組みに沿って史実を編纂した書物を言う。盛衰記はその叙述構成に対して、編年体に対する緊密な構成意識と、史実に準ずる叙述姿勢を有している。

第二点は盛衰記の年代記的構成に鹿谷事件発端部がいかに組み込まれたかについてである。一貫して日付けを臚化した鹿谷事件発端部を、諸本が記事を欠く承安年間に設定し、年代記的な体裁は整えられる。しかし謀議露見までの時間を埋めるため、鹿谷謀議の安元年間への分置が必要となる。年次を特定する記事を外し、改元記事をも欠落させて安元年間を臚化し、ここに鹿谷酒宴を時間的に融通のきく不確定な存在として設定する。このような自由な記事操作も、元来その構想が虚構であり、歴史の裏側の出来事として日付けの特定に固執されないものであったことによる。

ところで鹿谷謀議の分割は、鹿谷事件全体の構想にも関わっている。盛衰記の鹿谷謀議は、承安年間から安元年間

までの謀議の継続とその計画性が、年代記的構成の上に保証される。これは鹿谷謀議に、平家に対する最初のクーデターの試みである鹿谷事件の発端部に相応しい重みを与え、場面性を明確にしようとする編著者の構想によるものであろう。

鹿谷謀議の露見する治承年間に入ると、盛衰記を流れる時間は急速に緩み、厳密な意味で年代記的叙述をとることは難しくなる。いわば「月次記」的、あるいは「日次記」的な叙述となろう。年代記的性格を支える編年体とは、人物を中心として叙述を進める紀伝体の対義語であるように、その時々が生じた場面、起こった事件によって叙述を展開するものである。鹿谷謀議の分割という記事操作によって、その場面性・事件性を明確にしたように、治承以降、盛衰記は場面あるいは事件中心に展開する叙述構成へとその年代記的性格を活かしてゆくという見通しをたてることもできよう。盛衰記の年代記的性格は、源平の盛衰の物語を、歴史の一個の必然として普遍化しようとする編著者の意図を反映したものではなかろうか。後日の課題としたい。

註

(1) 石母田 正著『平家物語』(岩波新書)

(2) 杉本圭三郎氏「平家物語における叙述の方法―年代記的形式をめぐって―」(『文学』昭和五十九・八)

(3) 杉本圭三郎氏前掲論文。

(4) 年代記的叙述は物語的現在のの中に表されるものである。平氏の栄華を語った後、後白河院と二条帝の仲違いを語る永暦応保の頃より平家物語の諸本は物語的現在の中に入ると認められるようであるが、この点については、永暦元年に基盛乱行の記事の増補を見るものの、盛衰記においても同様である。しかし永暦応保の頃より永万年間に至る叙述は緊密さを欠き、編年体にも不備を有しているので、年代記的叙述の起点としてこの位置では不適當である。改元記事も永万以前には配されておらず、盛衰記における年代記的叙述の起点は、改元記事の配され始める永万年間に入った「永万元年春ノ頃」(巻二「二代后事付則天皇后」)の上に見るのが適當であるといえよう。

- (5) 使用テキスト 盛衰記―慶長古活字版（勉誠社・渥美かをる解説）、延慶本―勉誠社版（北原保雄・小川栄一編）、長門本―名著刊行会版
- (6) 静嘉堂（松井）本・蓬左本は「御年四才」とする。
- (7) 仁安三年の即位については四部合戦状本・寛一本にも見える。
- (8) 冨倉徳次郎著『平家物語全注釈』上巻（角川書店）
- (9) 玉葉 嘉応二年七月三日条、十月廿一日条。
- (10) 山下宏明氏は盛衰記の編著者に「物語を享受するというよりは史実に照らして裁断する」姿勢を認めておられる（挿入説話と物語の構想―『得長寿院供養事』をめぐる―『平家物語の生成』所収）。これに対して久保田淳氏は、盛衰記の編著者が一方で「まことしやかな作り話らしきものをもぬけぬけと語る」ことを指摘されている（「寛一本『平家物語』からはみだすもの―『源平盛衰記』を読むにあたって―『国文学』昭和六十一・六）。このような盛衰記の史実に対する両極の態度を「史実に準ずる叙述姿勢」という観点から捉えてみたい。
- (11) 記事のたて方は私意による。
- (12) 高橋伸幸氏が『平家物語割記』対照表注十に指摘されている。
- (13) 玉葉 承安四年七月廿七日条。
- (14) 四部合戦状本も同様の叙述を採る。
- (15) 盛衰記の白山事件記事を安元三年のこととして扱ってきたが、これに先立つ鹿谷酒宴の末尾、師高の加賀守着任記事に安元元年という年次が示されている（巻四「鹿谷酒宴静憲止御幸」）。この年次が物語的現在の上であれば、鹿谷酒宴は承安五年のこととして解釈すべきで、鹿谷謀議の分割は意味をなさなくなる。師高の加賀守着任記事の直前に配される北面由来の記事に、延慶本は西光・西景を引き合いに出して西光の子息師高による白山事件へと叙述を進めるが、盛衰記は西光・西景に対する説明的叙述を増補し、特に西光には信西の窮地を救ったエピソードをも付け加え、続く師高に対してもまた説明的叙述を増補している。盛衰記における師高の説明的叙述は、師高の姓名、官職、加賀守着任の日付けを増補改訂しながら続き、「目代師常在国ノ間」（巻四「涌泉寺喧嘩」）より物語的現在に戻ると見ることが出来る。これは盛衰記がこの後、師常を中心に白山事件の発端部を展開することとも一致する。

延慶本 第一本廿二「成親卿人々語テ鹿谷ニ寄会事」

(17)

延慶本 第一末七「多田藏人行綱仲言ノ事」

(付記) 本稿は関西軍記物語研究会第十二回例会（一九九一・四・二一 於関西学院大学）における口頭発表をもとにします。席上御教示頂いた方々に深謝致します。

——大学院博士課程後期課程——